『珊　瑚』

新田次郎

新田次郎は長野県に生まれ、気象庁に勤務していたが、富士山測候所時代の経験をもとに執筆した『強力伝』で昭和三十年、第三十四回直木賞を受賞した。

『八甲田山死の彷徨』などで、山岳小説家と呼ばれる新田が書いた唯一の海洋小説が『珊瑚』である。

サンゴに魅せられた三人の漁師と美しい島の娘はまとの恋物語は、五島の穏やかな風物と容赦のない厳しい自然を織り交ぜながら描かれていく。五島方言の「みじょか」は「かわいくて美しい」の意であり、はまの最後の夫である金吾が妻へ贈った言葉でもある。

サンゴ漁船の基地であった富江町只狩山には、「新田次郎先生　珊瑚之碑」が建立されている。

また、サンゴ遭難碑は、富江町の大蓮寺、妙泉寺、山下墓地、玉之浦町の西方寺にある。

『流れる星は生きている』の著者藤原ていは妻、『国家の品格』の著者で数学者の藤原正彦は息子である。